令和５年12月２日（土）

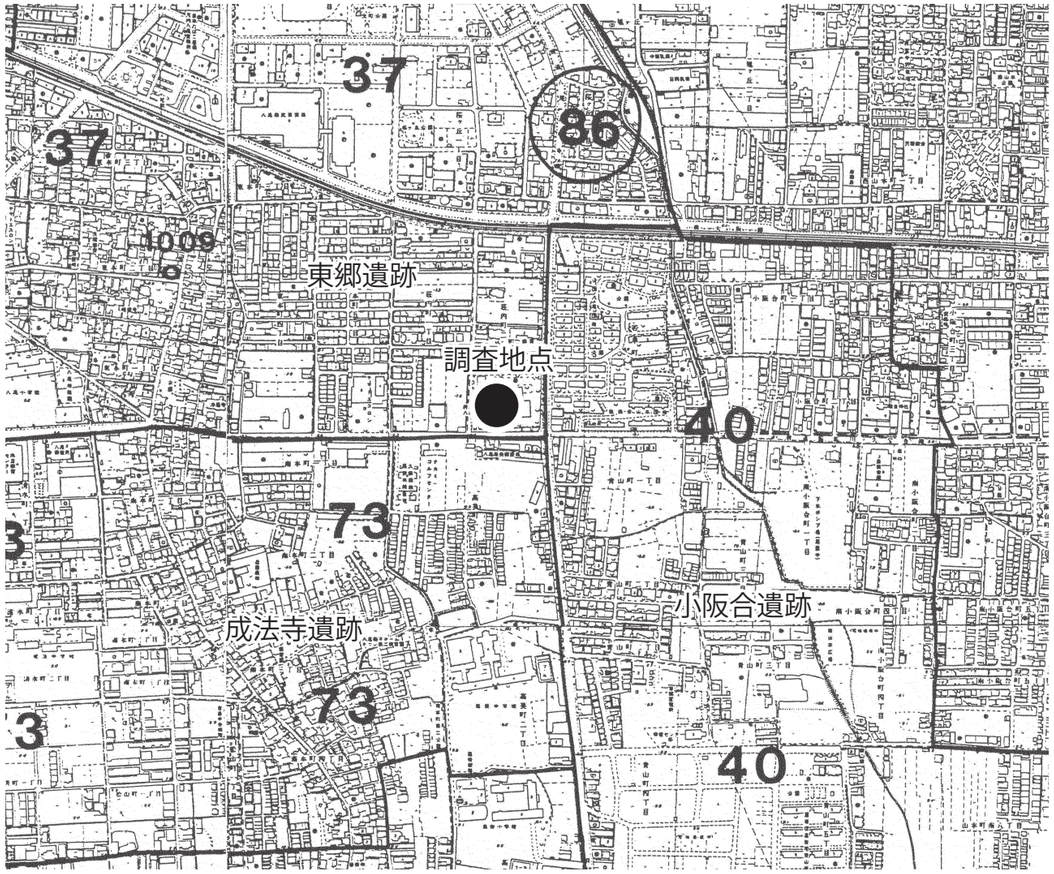
東郷遺跡発掘調査　現地公開資料

大阪府教育庁文化財保護課

はじめに

東郷遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置する、弥生時代中期から鎌倉時代にかけての遺跡です。周辺には北に萱振遺跡（弥生時代～江戸時代）、南に成法寺遺跡（弥生時代～鎌倉時代）、西に久宝寺遺跡（弥生時代～室町時代）、南東に小阪合遺跡（弥生時代～室町時代）が隣接しています。

東郷遺跡では、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、財団法人八尾市文化財調査研究会により多くの調査が行われてきました。今回の調査区周辺の過去の調査では、弥生時代後期後半から古墳時代初頭（３世紀頃）にかけての溝、古墳時代中期（５世紀）の竪穴住居、中世から近世にかけての耕作溝や井戸などが見つかっています。



東郷遺跡周辺の遺跡（1/10000）

調査成果

今回の調査は大阪府八尾警察署の建て替えに伴い実施しました。調査地の西側では古墳時代初頭の溝や土坑、古墳時代前期（４世紀）の土坑、古墳時代中期の柱穴や土坑、中世以降の耕作溝が見つかりました。中でも古墳時代前期の土坑からは、壺や甕などの土器とともに、鉄製品が出土しました。当時の鉄は貴重品であり、古墳から出土することが多い一方で、集落域での出土例は多くありません。

調査地の東側では古墳時代前期の掘立柱建物２棟、竪穴住居１棟、井戸、土坑、古墳時代中期の土坑、中世以降の耕作溝が見つかりました。**掘立柱建物**は、いずれも２間×１間の大きさです。建物の軸は北西－南東を向いています。建物01の規模は4.2m×3.2m、建物02の規模は3.1m×2.7mです。**竪穴住居**は南北5.5m×東西5.6mの隅丸方形です。住居内には屋根を支えていた４つの柱穴があります。南辺には礫を敷き詰めた部分があります。また中心に炭が溜まっており、炉の跡と考えられます。**井戸**の中には、上層と下層にそれぞれ壺や甕などの土器が置かれていました。上層と下層の土器の間には板材や腐食した植物が溜まっており、井戸は一定期間使用されたと考えられます。

まとめ

今回の調査では古墳時代前期から中期にかけての人びとがこの地で生活していたことを改めて確認することができました。これまでの調査をふまえると、今回発見した住居が調査地周辺の集落の北端に近いものと考えられます。また住居の周辺に土器を置き、当時貴重品であった鉄製品を置いている事例は少なく、貴重な成果です。今回の調査はこの地の歴史を考える上で大切なものであり、重要な成果となるでしょう。



井戸下層出土土器
（調査地東側）



土坑出土土器
（調査地東側）



調査地西側全景（北から）



土器群 A

やや大型の
壺や甕などが
置かれています



土器群 B

土器群 A と比べて
小型の壺や甕、
鉄製品などが
置かれています



柱穴及び柱

建物の柱の
一部が腐らずに
残っています